

コミュニケーション

今年も早いもので今年も気が付けば7月、博多の街にはいつものように山笠の季節がやってまいりました。また、七夕さまの飾り付けに願いごとを書いて、笹の葉さらさらと飾るのも楽しみの一つです。人は、人との関わりなしでは生活してはいけません。

良い人間関係は、人を成長させ、心に豊かさを与えてくれます。社内コミュニケーションを築くために、彩花では「おはようございます」という挨拶を、明るく行い、会話をする際「〇〇さん」と相手の名前を呼ぶことで、心を通わせることを心がけています。コミュニケーションが深まれば、仕事への意欲もより高まって行くと思います。



こんなことあるの？

仕事の問い合わせの電話が入りました。お相手は歯科医院の院長先生からで、クリーン彩花の車に「お掃除のことなら」とマーキングが入っているのを見て電話をされたとの事です。

掃除屋さんを探してあり、ホームページを見られて、賀茂に会社があることに好感を持たれたようです。

なぜかとお話をするうちに、先生は賀茂で生まれて、彩花近くの小学校、中学校を卒業したとの事でした。

10年間、事務所近くの横断歩道に立ち子供たちを見守っていたとか色々お話をするうちにお掃除の話になり、早速エアコン清掃のご依頼を承りました。そして、またまた、お話をしていくうちにビックリしたことが・・・

36年前、私は「がん」にかかりました。その時「がん」を見つけて頂いた医院の院長の息子さんだったのです。こんなご縁があるとは色々なことが重なって驚く出来事です。そんな繋がりで、親しみ深くなり、先生から床やガラスの清掃もお願いしたいと嬉しいお言葉をいただきました。こんなことがあるのかと二度ビックリの出来事です。これからもこんなご縁を大切に良い仕事をしてさらに関係を深めていきたいと思っています。

仕事って何？

仕事には「5つの意味」があります。

1つ目は、働くことで「出会い」をいただくということです。自分にとって厳しい仕事かもしれませんが、そのことをこなすことで経験という出会いをいただくのです。

2つ目は、「社会に参加」することができます。職場の上司、同僚のみならず、取引先の人など、さまざまな人たちとのつながりの中で仕事があることを知ります。

3つ目は、「学べる」こと。会社に就職すれば、そこでは知らない事だらけです。一つ一つの経験は決して無駄な事ではありません。謙虚に学ぶことで、人生は豊かになるのです。

4つ目は、「信頼関係」、仕事を通じて知り合った人との間に築くことができます。仕事をするということは責任を引き受ける事です。それは信頼にもつながっていきます。そして最後5つ目は、仕事が「自信」につながります。日々、積み重ねた仕事の結果、自信につながるのです。「事に仕える」と書いて「仕事」。世間が私に何をしてくれているか？ではなく、私が世の中に対し、どう仕えるのか、私に出来ることを精進していきましょう。

心のレンズ

心のレンズは積極的な心構えを維持するうえでも意味があります。積極的に自己否定的な考え方を、積極的に自己肯定的な考え方に置き換えるよう、意識的・能動的に努力することです。積極的な心構えとは「心のレンズ」なのです。レンズが黒味を帯びていれば見える景色は当然暗い。ひきかえ、空の色のような透き通ったレンズを通してみれば、景色はもっと明るいものになる。もし、風景が薄暗く煮えるようだったら、別のレンズに変えればいいだけの事です。見たくない風景を前にいつまでもたたずんでいる必要はない。レンズはいつでも取り替える事が可能なのです。あなたは、自分次第で見たい風景を選択できる。もし、毎日が退屈でしかたないと思っているならば、あなたの手中には別のレンズがあることを知っておいて欲しいのです。



名残のクニ日本

■黒糖アメとチョコピー

3週間ほど前のことです。スナックでうち興じたあと、連れの面々でおもむろに地上へ。そして相互に挨拶をして別れようとしていたその矢先のことでした。「今日はありがとうございました」「又の起こしを」と全員に小袋に入った黒糖アメとチョコピーが手渡されたのでした。



20年続いているというスナックママの小さな心配りです。

帰りの地下鉄のなかでポケットからとりだし、子どもにもどった気分でポリポリいただきました。どちらも逸品で上品な味でした。

些細なできごとですが、ママの心配りのおかげでほっこりとした気分になり、小さな幸せとして心に残っています。

日本には名残(なごり)、余韻、余情、面影という独特の言い回しがあります。

あからさまな物言いをよしとせず、ぼんやりとしているけれど、いつまでも心に残る振る舞いや小さな出来事を大切にしようという気持ちに満ちた表現です。それは日本的な心情や文化と言ってよいと思います。

人は記憶と共に日々生きています。「あのママ」のエピソードのあと、いつまでも残る記憶と、すぐに忘れてしまう事柄の差はどこにあるのだろうと考えをめぐらしたことでした。

■記憶の糸つむぎ

もう一つ。小学校5～6年の頃、夏になると家から小一時間歩いて市民プールに行っていました。

その帰りぎわ、友人たちと食べたうどんの味と、冷えた体に感じた温かさを今も覚えています。

“うどん”が記憶の糸をつむぎ、当時のシーンをいまでも浮かび上がらせてくれます。

その時の旨さが記憶のフック(留め具)として今も生き続けています。

ママがくれた黒糖アメとチョコピーも同じです。いつまでも記憶として残って「そうだ、あのママの店に行ってみるか」ということになりそうです 😊。

人と人、人と店のあいだに、記憶のフックとなる要素が存在しているかどうかの関係性の持続や商売付き合いの大事な別れ道になることが容易に想像できます。

先日、記憶のメカニズムということで、NHKが最新脳科学の紹介をしていました。脳には嗅球という嗅覚情報を処理する領域があるそうです。そこに匂いの情報が集まると、ゆらゆらとした混沌(カオス)の状態生まれ、その中から突然ポツと一つの指向性やパターンが立ち上っていく。

「これは今まで体験したことのない匂いだ」「苦手だった匂いがこのハーブとあわせたら好きになった」といった具合です。それは情報の塊として海馬という場所に移され、他のいろんな知覚情報と結び合わされることで、エピソードとして記憶されていく。印象的なできごとがほかの情報と結びつき人の記憶として定着していくという記憶のメカニズムは嗅覚以外でも同じだそうです。

名残や余韻の世界が科学的に次々と明らかにされていることを知り感銘を受けました。

■名残おいしい存在へ

人間関係、スクールライフ、事業経営・・・いずれにおいても、記憶につながるちょっとした出来事が大きな意味をもっています。「ブランド」はまさに人の心に「記憶」を刻むことです。

これまで、記憶される、選ばれる存在となるための方法として、資金を投じてコマーシャルを打ち、情報を発信していくことの大切さが喧伝されてきました。けれどもこのあたりで一度立ち止まり、「黒糖アメとチョコピー」のような温もりのこもった余韻や名残としてそっと置いていくことの意味を振り返ってみたらどうでしょうか。

この新聞もそうだし、一筆箋への手書きお礼、記念の品など、さりげない何かが人の気持ちをつかみご縁がつながっていくとしたら、これほど楽しいことはありません。

互いに名残おいしい存在となり、三方よしの関係が広がっていくとしたら人生の大きな喜びです。(らく)

